



〒183-8534
東京都府中市朝日町3-11-1
東京外国語大学
ロシア語渡辺研究室内
東京外語ロシア会
TEL & FAX 042-330-5265
振替口座 00110-8-22338

昭和11年頃の東京外語露語部と私

早川 徹



者用仮設住宅に似た灰色の一階建て校舎が濠端に沿った窮屈な敷地に苦のよう張りついで広がっていた。貧相な校門から校舎に入ると、左手の広いホールの一廓が学生食堂になっていて、「シンチャン」という愛敬のいい中年の夫婦が貧乏な学生にカレーライスやうどんかけを廉い値段で食べさせてくれた。右手に広い講堂があった。

地平線に暴風が迫っていることを予告する黒雲が次々と姿を見せていた時代だった。日本の国全体が引き返せない激流に押し流されて、大破局へ向かってゆっくりと動いていた時代だった。なにかキナクサイ匂いが立ち込めていた。学生たちもその巨きな流れの外にいられなかったのだが、東京外語露語部の学生たちは一見何気ない学校生活を呑気に送っているようにみえた。その頃外語の校舎は一橋と呼ばれる皇居の濠端にあった。この頃の被災

モスクワから帰ったばかりの朝日新聞の丸山政男特派員からスターリン独裁下の新しいソ連の現状報告を露語部全学年の学生が聴いたのは、この講堂だった。後に日ソ学院院长となった丸山氏の働き盛りの顔がビカビカ輝いてみえた。氏の「ソヴェト通信」(羽田書店)がベストセラーになった。新聞記者になろうという望みが心に灯ったのはこのときからだ。教室も安普請で、スレート壁だから隣の教室の雑音

府中だより

渡辺雅司

東京外語ロシア会会計報告

ブーチン大統領とユーラシア主義

日露修好一五〇周年記念事業に参加して

世界との交流

ロシア会総会・懇親会のお知らせ

坂本翔一

佐藤ゆき子

堀口大樹

8 7 6 4 3 2

が聞こえた。あまりうるさいと、壁をたたいて静かにさせた。教壇の反対側は大きな四枚のガラス窓になっていて、窓に近い最後列に陣取った学生が教官の出欠点呼に「ハイ」と答えると、その窓からエスケープした。代返も流行了。

こうした呑気そうな学窓の外でどんな荒波が学生たちを待ち構えているかは、見かけは呑気な彼らにはよく識っていた。なにしろ、松竹映画「大学は出たけれど」がヒットした時代だった。「満州国」の成立、日本の国際連盟脱退、盧溝橋事件が引き金となった日中全面戦争、日独伊防共協定、張鼓峰とノモンハンの日ソ軍事衝突、……、思いつくままに並べても、この頃学窓から果立っていく若いロシア語使いたちを迎える環境の険しさがすぐ分かる。

そして、ロシアとは違って、日本の「ヴ・ナロード」運動は大正14年の「治安維持法」の大弾圧で呆気なく潰え去った。ロシア語を学んでいると「赤」じゃないかといわれた時代だった。就職先はまことに狭い門だった。

母校で教鞭をとるのは一番陽の当たる「王道」だった。才能と運とそれから思想傾向が先生たちの運命を決めた。ソ連と事を構えたときに備えた陸軍の教育施設、例えば幼年学校の教官になる道もあった。そこから本命の母校へ転じた先生は少なくない。次はジャーナリストの道だった。新聞社や通信社の記者になって、うまく行けばモスクワ駐在の特派員になる道なのだが、狭い門だった。外務省の書記生になる道があった。ソ連やスラブ系の東欧諸国の大公使館、領事館ならロシア語が役に立つ。外交官試験に受かったら、エリートコースものだが、それは砂漠に落とした針を探し当てるのに近い。あとは、米川正夫、中村白葉、原久一郎のいわゆる「御三家」をはじめ「左派」ではシヨロポフの「静かなドン」を訳した外村史郎(馬場哲哉)などロシア文学者、翻訳家の大海があった。国際情勢が切迫してくると、北支、中支に網の目のように張り巡らされた陸軍の特務機関でロシア語使いの需要が急増した。その需要に応えたのは不思議に「左翼」からの「転向者」が少なくなかった。

さて、これまでの当時の露語部の学生たちについての私の語りぶりには他所者(よそもの)めいた冷淡さがあるが、実は六年にわたる在学中私には「交友録」と呼ぶほどの学友たちと共通のたのしい思い出がない。級友と文

府中だより

渡辺 雅司

どうも大学の行事というものは後期に集中するようで、前号発行からの半年間のロシア語科(専攻)には特記する動きはありません。ただ9月から亀山郁夫教授が付属図書館長に就任したことをお知らせします。独立法人化以降、図書予算が削られる中で、大学の知性の象徴である図書館の質を守るためにアイデアマンとして活躍してほしいものです。学長特別補佐として、大学広報も統括する亀山教授にエールを送りましょう。

ロシア国立人文大学との交流協定も5年が経過し、これまでに私費も含め数十名の外大生が留学し、人文大からも毎年1名の学生を受け入れてきました。人文大学はかつてのモスクワ国立歴史文書大学を母体として、一九九一年に創設された新しい大学ですが、モスクワの中心に位置し、18の学部をそなえ、ペレストロイカで活躍したアフアナシエフを学長に、現代的で開かれた教育センターをめざしており、今もつとも注目されている大学です。学生だけでなく二〇〇二年には鈴木義一助教授がここを拠点に海外研修をしていますが、そこでロシア語科としては協定の5年間の更新を決め、9月に専攻代表

の高橋清治教授が研修をかねて人文大に赴き、更新手続きをとり、教授会でも承認されました。今後は共同研究もふくめ、幅広い交流ができるよう努めつもりです。

今年の東京ロシア語学院主催のロシア語弁論コンクール(朝日の弁論コンクール)が数年前に廃止されたので、創価大学主催のものとならぶ全国規模の大会では、外語勢が上位を独占しました。好成績をおさめた背景には第一に滝川ガリーナ助教授の熱血指導がありました。記して感謝に代えたい。またこの号に寄稿している坂本君のように、人文大での交流で人間的にも一回り大きくなり、その体験をスピーチにの留学生も個性あふれる優秀な人材ぞろい、私たちの講義を聴講するものもあり、それを機に学生たちとの交流も広がり、相互に刺激を与え合っています。

11月19日(土)のロシア会総会は故原卓也先生の一周忌、原卓さんの思い出を若い学生に語り継ぐ場にしたしたいと思います。できるだけ多くの方々への参加を期待しています。なお今年の語劇は19日18時20分から、出し物はチェーホフの「ワーニャおじさん」、昨年につづいて名演を期待しましょう。

(昭44・東京外国語大学ロシア・東欧課程ロシア語専攻教授)

【1頁の続き】

学、人生を語って談論風発して暁に及んだという青年らしい思い出はない。親友と、一、二泊の小旅行を楽しんだ思い出はない。私は学費は勿論衣食住の資も自分の汗で得なければならぬ「苦学生」だったので、「青い山脈」の歌のように学友らと青春を謳歌する学生生活のたのしさはほとんどなかった。二年間の休学も学資の都合がつかなかったからで、二年後原学年に復帰したのは当時の主任教授だった八杉貞利先生に「これ以上休学するとキミ、戻れなくなるよ」と促されたことだった。

私は二年間の休学中ゴリキーの謂う「私の大学」で学んで全く別の人間となって、教室に戻った。だから私は昭和9年卒業組と昭和11年卒業組とに友人をもっていた。なかには中学から同級の顔もいた。彼らの99パーセントは故人になったが、そのなかで永い親友となったのは卒業後に結ばれた宿縁の人が多い。奇妙なことに、私には同輩の学友より、教官の諸先生に親身の世話になり、その暖かい思い出が外語でのノスタルジックな「交々録」になっている。「怖つかない」八杉先生はそんな資格のない私に当時帝大生だった長男の竜一氏に初級ロシア語のアズバカを教える仕事を与えて下さった。学資の助けにという先生の気持ちに身に沁みた。私は日本の名高いターウイン学者に初級露語を教えたという名誉を計らずも荷った訳になる。北樺太石油

会社の入社試験当日の早朝願書を出さなかった私の下宿先に奈美夫人が受験票を届けて下さったのも、昔は「怖つかない」先生の優しい心使いだった。日本最初の和露大辞典を独力で作った松田衛教授は復校後の私に「足長おじさん」を紹介して下さいました。先生の親友のY商事社長はリトアニアの名譽領事をしていた。そのお陰で短い間だったが、私はまともな学生生活に専念できた。本命の満鉄調査会の入社試験を滑り、忽ち困窮した私に外務省囑託の口を世話してくれたのも、この松田先生だった。手を伸ばしてくれたのは主流保守派の「怖つかない」教授だけではなかった。外村史郎こと馬場哲哉先生は人目を忍ぶ様子で「ソ連作家同盟第二大会議事録」の下請翻訳の仕事に夜更けのお宅で私に托して下さいました。

それから、それから、……と思いは尽きない。文字通りの「恩師」たちというしかない。私は最後まで「ソ連派」になれなかった。「ソ同盟はわれわれの祖国」という言い方に強い違和感を覚えたからだった。二・二六事件の余韻がまだ遺っていた直後に、昭和11年卒の東京外語露語部の学生たちは不穏な日本社会へ旅立って行った。「不語似無慈」の感慨に堪えない。(完)

(昭和11年卒業、元読売新聞外報部長)

会計から

ロシア会の会費は、外語会の会費とは別立てになっており、つぎの通りです。

終身会費

三万円(振込料 一〇〇円) または

年会費

二万円(振込料 七〇円)

納入頂いた状況は左表の通りで、前年度に比べ終身会費を納入された方は六名、年会費を納入された方は九名増加しました。これにより年間収支は三年ぶりに黒字に転じました。

ロシア会の会員約二千名、内約千名の方が外語会の終身会員ですがロシア

会の終身会員は約二百名に留まっています。会の活動を充実したものにす為には資金的基盤の強化が必要で、引き続き皆様のご支援を切望致します。又、勝手なお願ひですが、ご支援の形はなるべく終身会費でいただきたくお願い致します。

尚、懇親会への補助が大きな支出項目となつていますが、これは先輩と後輩が言葉をお交す機会として学生は無料にしようという旧ロシア会 八杉先生

以来の伝統を継承しているためであります。
(追伸) 会報送付の封筒の宛名頭部に〇印のある方は終身会費か今回分の年

会費納入済みの方なので払込票は同封してありません。

二〇〇四年度 終身会費納入者

(納入日付順・敬称略)

石井雅博、若林誠一郎、植田樹、吉田久美子、山内孝次、喜田美樹、北原寿子、木田ミキ、辻本紗友子、栗原和子、真許容子、榎本健吉、玉置八重、宇野功二、小塩博史、杉浦正樹、野口五男、佐藤直子、小師尚子、玉木裕、太田さち子、松田素子、真木実彦、真木三三子、匿名希望一名

ロシア会会計

池田英友 大浩義之

東京外語ロシア会2004年度収支

(2004年4月1日~2005年3月31日 単位 円、監査実施済)

1 収入	終身会費 (25名、単価3万円)	750,000
	年会費 (62名、単価2千円)	141,000
	払い過ぎ会費 (2名 各2千円)	4,000
	利息	134
	合計	895,134
注. 年会費には年会費には4千、5千、6千、1万円納入者あり		
2 支出	会報制作費(印刷製本他作業代)	148,621
	会報宛名ラベル(支払先、外語会)	15,700
	会報郵送費	150,960
	払込票への印字費(支払先郵便局)	2,100
	原先生お別れ会 生花	15,750
	霊園管理料(ミチューリン先生)	3,540
	会議費(サテライト室料他)	2,940
	雑費(払込手数料4件)	1,050
	懇親会への補助	353,320
	合計	693,981
3 差引計算及び繰越金		
	差引剰余金	201,153
	前期繰越金	3,411,364
	次期繰越金	3,612,517

ロシア会懇親会収支(2004年11月20日実施、単位 円)

1 収入	出席者会費(卒業生51名 単価6千円)	306,000
	寄附(1名)	6,000
	本会計からの補助	353,320
	合計	665,320
2 支出	会員案内費(往信葉書代1931通、返信受領料金174通、印刷費)	147,063
	宛名ラベル代(支払先:外語会)	16,000
	料理代(外語生協)	400,000
	飲物代(村野商店)	67,432
	払込手数料(3件)	825
	テルミン竹内氏謝礼	30,000
	同 花束代	3,000
	雑費(コピー代:外語生協)	1,000
	合計	665,320

夏の夕べのコンサート

今年の夏は暑い日が続きました。そんな暑い日だった8月19日の夕べ、山王病院1階中央アトリウムで、折から、帰国中の東佐智子さん平了さんと程内綾乃さん(ピアノ)のコンサートがありました。「モスクワ楽派の系譜」アレンスキー没後百周年に寄せて」と題するコンサートで、チャイコフスキー、タネーエフ、アレンスキー、ラフマニノフ他ロシアの作曲家による歌曲を東さんのソプラノ独唱で聴きました。用意されたロシア語の歌詞に目を走らせながら、表情豊かに歌われる曲を聴きました。

プログラムのほとんどが日本では初演とのこと。このようなロシアの歌曲をたっぷり聴ける機会はありませんと思われました。入院患者さんの姿も見え、いいコンサートでした。

東さんはロシア国立サンクト・ペテルブルク音楽院声楽科に学び、在籍中、「フィガロの結婚」のケルビーノ役でオペラ・デビュー。同音楽院修了後、ロシア国立マリインスキー劇場アカデミーに所属しています。今年の12月には「日露修好一五〇周年記念」の一環として行なわれるロシア大統領迎賓館でのコンサートに出演予定と聞いています。益々のご活躍を祈っています。

(YM)

プーチン大統領とユーラシア主義

佐藤 ゆき子

(東京外国語大学大学院二年)

1. 「プーチニズム」

日本でもプーチン大統領指導下のロシアは、欧米流民主主義からはかけ離れた権威主義国家、専制国家であるとの論評が頻繁に聞かれる。今年、邦訳されたアンナ・ポリトコフスカヤ「プーチニズム」(鍛原多恵子訳)でもプーチンに関する評価は散々だ。「ロシアの現状を目的にすると、西側の人のように好意的にプーチンを評価できなくなるのはなぜだろう。それはプーチンが、この国でもっとも嫌悪すべき旧ソ連の秘密警察、KGB出身の者として、大統領に選ばれた後にも、その素性を忘れないし、この特務機関の中佐然とした振る舞いをやめせず、やたらに自由を求める同胞の弾圧にまさに血道を上げ、相も変わらず自由を蹂躪し続けているからだ」(20頁)

特務機関出身者が大統領になったからといってプーチンのロシアを危険視することには論理の飛躍がある。例えば、ジョージ・ブッシュ元米大統領(現ブッシュ大統領の父)は、CIA(中央情報局)出身であるが、同人大統領になったとき、特務機関出身者だからアメリカが危険な国になったと

いう批判は聞かれなかった。CIAについても決して民主的な機関ではなく、政權転覆や暗殺に従事していたのは公然の秘密だ。

2. ソ連への回帰

ポリトコフスカヤは気骨のある社会派ジャーナリストで、ロシアでも報道関係者の中では尊敬されている。しかし、国民的人気はなく、また現実政治にもほとんど影響を与えることができない。昨二〇〇四年九月のベスラン事件(北オセチア共和国のベスラン市でチェチェン人、イングーシ人などのイスラム系テロリストが小中学生を人質にとり、多数の死傷者が発生した事件)直後に現地取材に赴く途上、彼女は飛行機の中で薬を盛られ、一時意識不明になったことがある。ポリトコフスカヤはベスラン事件後のロシア情勢を次のように特徴づける。「さてベスランの後の状況はどうだろうか。『党と人民は一つ』とソビエトのスローガンにはある。現実には日ごとに裂け目が広がっている。だがテレビ映像はこれとは対照的な印象を与えている。ソビエト式官僚主義が戻りつつあり、より強

力になっている。かつての政治の冬の再来だ。ここでは雪解けの徴候は見られない」(18頁)

この観察は正しいと私は思う。エリツィンが一九九九年の大晦日に任期前辞任し、プーチンを大統領代行に指名するまで、ごく一部のクレムリン・ウオッチャーを除いて同人が後任大統領になるとは誰も思っていなかった。KGBの中佐は、どこにでもいる中堅官僚に過ぎない。プーチンがつとめたサントペテルブルグ市国際問題担当副市長も、クレムリンのヒエラルキーから見れば取るに足らないものだ。プーチンは大統領に就任するまでのわずか一年半で急速にキャリア街壇を駆け上ってきた。プーチン個人に特別の力があることがあつたわけではない。換言するならば、プーチンでない誰か別の人物がエリツィンに指名され、大統領になつたとしても何の不思議もない。私はプーチンでない平均的ロシア人が大統領になつたとしても、「プーチニズム」がロシアで支配的になつたと思う。なぜなら、プーチンの国家イデオロギーは、ロシア人の潜在意識を受肉化したものなのだ。

3. 国家イデオロギー

「ふりこ」現象

プーチンのロシアは確かにソビエト時代との連続性が高い。私が見るとこ

ろ、ロシアでは大きな揺り戻し現象が起きている。ロシアの国家イデオロギーは「ふりこ」のように反復する。あえて図式化するならば、普遍的理念を追求するベクトル(レーニン、トロツキー、前期スターリン、フルシチエフ、ゴルバチョフ、前期エリツィン)、固有の理念に収斂するベクトル(後期スターリン、ブレジネフ、後期エリツィン、プーチン)がロシア思想史では循環する。よりロシアの内在的ロジックに即して言うならば、固有の理念に固執する内向きの状態が基調で、時折、普遍的理念を求めて拡張する傾向があると整理できよう。このロシア国家イデオロギーに通底するのがユーラシア主義であるというのが私の作業仮説である。

繰り返しになるが、現プーチン政權の強さは、大統領に就任する一年半前は本人を含む誰も大統領候補と考えていなかった中堅政治エリートが国家最高指導者になつたことである。そして大統領就任後一、二年でカリスマ性を身につけ、過去25年では最も安定した国家運営を行っている。プーチンは代替可能であつた。換言するならば、中堅政治エリートの誰か別の人物が大統領になつてもプーチンと同一の政策を採用すれば、安定した政權基盤を構築できたことである。プーチンのイデオロギーはロシア人が無意識に持っている共同主観性を体現している。

4. 共同主観性としての ユーラシア主義

私はこの共同主観性がユーラシア主義と考えている。ユーラシア主義は欧米思想にアンチを唱える対抗イデオロギーとしての特徴が濃厚なので、定義をしようと却って重要な要素が抜け落ちてしまうのであるが、暫定的に「ヨーロッパとアジアにまたがるロシアは、ユーラシアという独特の地政学的地位をもっており、西欧ともアジアとも異なる内在ロジックで動き、発展する」という定義を与えておく。ユーラシア主義を明確に唱えたのは一九二〇年代から三〇年代初頭にソフィア、ブラハ、バリなどに亡命したロシアの知識人たちだ。ユーラシア主義はロシア人にとって空気のような存在だから、それをロシア人が説明することは難しいのである。サビツキー、トルベツコイ等の亡命者は、チェコやフランスなどの異質な文化圏で自己的的活動を反省する過程で「ユーラシア」というキーワードに気づいたのであろう。

私が見るところ、スターリン、ブレジネフ、プーチンという安定政権をイデオロギー的に説明する鍵がユーラシア主義にある。恐らくは、ロシアの領域は広大すぎるので、通常の国民国家原理によって国家統合を維持することはできないので、国民国家を超える(ネグリ/ハート流に言うならば)「帝国」の理念が必要とされるのであろう。

ネグリ/ハートは、レーニンが規定した「資本主義最高段階としての帝国主義」と「帝国」は異なる」と強調する。「帝国主義」は国民国家原理を基礎とする宗主国と植民地の関係からなる近代の現象であるのに対し、現在、国際社会に生じつつある「帝国」は、アメリカと等号で結ばれるような地理的概念ではないが、他方、マルクスが「資本論」で想定したような、純粹な、理念的には全世界を覆ってしまう普遍概念としての資本を意味するものでもない。私の理解が正しければ、ネグリ/ハートの唱える「帝国」は18世紀にライプニッツが提示した「出入りする窓のないモナド」に近い、一種の完結した単位のなかで、全世界、全宇宙を映し出すことのできるシステムだ。従って、一見、「帝国」に対するアンチテーゼとして打ち立てているように見える「マルチチュード」も「モナド」であり、抵抗の主体という完結した単位が、同時に全世界、全宇宙を映し出すという構成になっている。ただし、ライプニッツのモナドロジは神を指定していたので、「モナド」相互は予定調和的に共存していたが、ネグリ/ハートの論理構成では「帝国」と「マルチチュード」が予定調和的に共存することはできず、抵抗の主体である「マルチチュード」はあくまでも「帝国」に対して戦いを挑んでいくことになる。

プーチンのユーラシア主義が、ライプニッツの「モナド」の論理構成をし

ているのか、ネグリ/ハートの「モナド」なのか、私にはまだ判断がつかない。ただし、「モナド」的なイデオロギーの視座をプーチンがもっていることは間違いない。

5. 多元論としての ユーラシア主義

ここで混乱してはならないのは、汎スラブ主義、国際共産主義のようなイデオロギーとユーラシア主義が根本的に異なることだ。

帝政ロシア末期の汎スラブ主義、ソ連の国際共産主義のような未来の理想社会建設に向けた理念は普遍的である。アメリカの新自由主義者が進めている市場至上主義も普遍主義だ。

これに対して、ユーラシア主義は普遍的概念を認めない。その替わりに全体概念をとる。全体とは田辺元が言う「種」であり、ライオン、猫、犬、熊などのようにそれぞれの動物の種類で完結した全体である。舞台作は「並立する他の全体に対して見れば、全体はつねに多数あるということになるであろう。全体は決してこの宇宙に存在するものの総体をつくすということとき意味において用いることはできないから、私たちの生活する範囲には多くの全体のあることを認めなくてはならない。全体は多数である」(『20世紀思想・全体主義』河出書房、一九三九年、3

頁)と強調する。この視座はプーチンのイデオロギーを理解する上で極めて有益だ。プーチンは、本二〇〇五年九月五日に行われた外国人政治学者や分析専門家との懇談で、ロシアに作られたのは「統制民主主義」ではないかとの非難に対し、「私たちは何でもただ模倣するといふわけにはいかない。それは非生産的だ」と述べ、他国の民主主義を真似るのではなく、ロシア独自の民主主義への道、すなわち「主権民主主義」を主張した。この「主権」とはまさに全体であり、ロシアユラシアという「種」あるいは「モナド」なのである。プーチンは多元論者で、ロシアの論理をユーラシア外部の世界に押し付けようとはしない。その裏返しであるが、外部世界の論理がユーラシアに押し付けられることには抵抗する。

ポルトコフスカヤはロシア人であるが、ユーラシア主義を理解できていない。報道の自由や民主主義が普遍的であると彼女は考えているのであろう。しかし、ロシア人にとって、報道の自由も民主主義も普遍的概念でなく、それぞれ「モナド」において異なる概念なのだ。それだから「主権民主主義」というユーラシア空間(その核となるのはロシア)でしか通用しない「民主主義」というプーチンの主張に圧倒的多数のロシア人は抵抗感をもたないのである。

日露修好一五〇周年 記念事業に参加して

堀口 大樹

今年の日露通商条約が締結されて一五〇周年にあたる。それを記念して6月24日から7月8日まで行われた回航事業に参加する機会を得た。日露青年交流センター主催によるこの事業の目的は、日露関係の将来を担うべき両国の青年が同じ船にのり共に生活をし、意見交換や文化交流を通じて相互理解を深め合い、また日露交流のゆかりの地を訪問して日露間の歴史を再確認してこれからの日露関係を作っていくというものである。

この事業に参加したのは、ロシア語・ロシア文化を勉強している日本人学生、日本語・日本文化を勉強しているロシア人学生、各国の伝統芸能をしている学生やジャーナリスト、政府関係者など計一六〇人に及んだ。日本側の学生は、日露学生会議・日露学生交流会といった団体や能サークルの一橋観世会、また私が所属しているロシア語劇団コンツェルトから計50人が参加した。

日本人参加者は富山県伏木港からロシア客船ルーシ号で一日半かけてウラジオストクに向かい、そこで、全ロシアから集まったロシア人参加者たちと合流した。ウラジオストクでは極東大学にて日露学生会議と題して、参加者代表者による二ヶ国語(日・露)によ

る日露関係についてのスピーチや、文化交流が行われた。普段あまり聞く機会がない、お互いの意識や、両国の若者がこれからのように交流していくべきか、など様々な提言がなされ意義深かった。またロシア(特に極東地域)では、かなり日本語教育が普及し日本への関心が高いことが、ロシア人学生のスピーチや彼らの日本語、日本文化のデモンストレーションをじっと見つめる眼差しからうかがい知ることができた。



生まれて初めて折り紙に挑戦

また私たちの劇団コンツェルトは今年で35周年を迎えるが、このウラジオストクがロシア初公演の場となった。私たち日本人学生はロシア語でロシアの戯曲を演じているが、観客の大部分がロシア人というのは始めてであった。

函館港停泊中の船上でのレセプション
右から二番目が筆者



理解されるか不安もあったが、無事に現代劇作家N・コリャグーの「ウィーの椅子」は好評を得た。何よりもまず、勉強している外国語で劇をすることがいかに外国語学習において有効であるかは、ロシア人学生も知っていて、ある学生は大学の日本語の授業で日本の昔ばなしをしたことがあるそうだ。

しかしそこで話されている日本語は私たちが日常使うそれとは異なっている点で、現代戯曲というのは、言葉のスタイルや現代のその国の社会や文化を知る上で、古典とはまた一味違った面白さがあるという印象に達した。また、日本語が特にうまい学生は、自ら進んで、放課後の日本語サークルや日本語を使った簡単なアルバイト、自分の関心に沿って(たとえば邦楽やアニメ・漫画、日本語のスラングなど)勉強を

楽しんでいるようだ。つまり大学の授業以外にことは勉強したり、その国の文化に親しむことの大切さを確認しあった。



下田港にて解散となった参加者たち。皆で別れを惜しんだ

一行はチャーター便となったルーシ号で函館そして条約締結の地である下田へと向かった。函館では、日本で最初の大使館であった旧ロシア領事館やハリストス正教会、下田では、条約が調印された長楽寺や大津波で大破したディアナ号の船員たちが眠る玉泉寺を訪れ、日露交流の歴史を垣間見ること

ができた。船上でも日露の歴史に関するセミナーが開かれたり、また文化交流では茶道や習字、着物の試着などの日本文化体験が行われ、またロシア側からはロシアの民族音楽や、バレエをはじめとする舞踊の披露など、盛りだくさんの内容であった。

船という閉ざされた空間の中では必然的に、仲もよくなってしまう。デッキで毎晩歌を歌ったり、夜遅くまで(時にはお酒を片手に)自らの恋愛から日露関係を語り合ったりと、皆存分に青春を満喫した。このような若者同士とのささやかな交流の中から、明日の日本とロシアをつなぐ人材が生まれ、21世紀の日露関係が明るいものとなっていくことを皆で望んだ。

(東京外国語大学ロシア語専攻三年)

世界との交流

坂本 翔一

幸運にもモスクワへの留学が決まり、今年の5月までの約9ヶ月間ロシア国立人文大学にてロシアを体感してきました。ロシア語文法を理解したり長文を日本語訳したりすることで満足していた自分にとってはロシア語の奥深さを知ると同時に、ロシアという広大な国を直接肌で感じる絶好の機会でした。大学内に日本人は少なく、毎日が異文化とのふれあいのようで私にとって非常に新鮮なものでした。ですが

「ロシア」についての知識が乏しく、そして自国「日本」についても誰か(何か)の助けなくては詳しく語れない私にとっては授業や生活の中での苦勞が絶えませんでした。ロシアの歴史、現状を把握しないことにはロシアを知ることができませんし、ロシアと比較し、自国・日本について語れないことには異文化コミュニケーションも困難です。日本人が少ないことは確かに新鮮ではありましたが、逆に自分の「日本人としての責任感」のようなものが大きかった気がします。まさに日本代表です。私が今回の留学で一番学んだことは、留学とは世界を知るだけではなく、自国を見つめなおして世界にそれを紹介するために存在するのだということです。正直、留学中は日本をいかにアピールするかに悪戦苦闘してばかりでした。



全国ロシア語コンクールの優勝杯を手にした筆者

もちろん言語間の壁のようなものは何度感じました。なかなか自分の言いたいことが伝わらず、異文化コミュニケーションという壮大な目標とは裏腹にもどかしい日々でした。ですが、各留学生在が「国の代表」となるため、授業内外を問わず「自国アピール」と「他国への興味」はずいぶんありました。そこで驚かされたのは、近隣のアジア諸国はともかく遠いヨーロッパの国々の人々が日本を非常によく知っているということでした。言語間の壁があるとはいえ、日本をテーマに語り合えるというのは何とも嬉しいものです。異文化とのふれあいとはいっても、必ずしも「国」をテーマにしなくてもいいのです。私は中国留学生と相部屋で、完全にひとつの部屋で共同生活を送っていました。彼は私にとって一番身近な「交流」相手と言えるでしょう。彼とは自国の話はもちろん、お互いの趣味や特技、学校生活、人生観や恋愛観にいたるまで様々なことを語り合いました。一晩中語り合ったことも少なくありません。ほんと他愛のない話題を新鮮と感じ、楽しく語り合えるというのは留学のひとつの醍醐味ではないでしょうか。「政治・経済」や「歴史」、「文化」の交流ももちろん大事ですが、私はこのような交流も不可欠ではないかと思っています。

ロシア人との交流も非常に有意義なものでした。ロシアを知ることが大きな目標であったので、むしろ彼

らとの交流が一番の収穫であったのかもしれません。

私はロシア人学生が中心となったM A Hというラグビークラブに所属していました。もちろん外国人は私一人です。そこでの出会い・経験は日本では決して体験することのできない貴重なものでした。「和」を尊ぶ日本人から見た同世代のロシア人、広大な国・ロシアに対する極東の島国・日本の見解、そして両文化の相互理解へのアプローチなど、ラグビーというスポーツを通してながら実に多くのことを学びました。その学生同士の交流から私を感じ取ったもの、そして私個人の考えるスポーツを通してロシア・日本間の交流というものを何か文章にして誰かに伝えられないものかと考え、帰国後、「第34回全国ロシア語コンクール」にてスピーチさせていただきました。最終的にコンクール優勝という結果を得て私の留学は終わったわけですが、その結果よりも留学中に自分が得たものの方が今後の自分にとって非常に意義のあるものだと感じています。外国語を学ぶ者ならおそらくほとんどが口にするであろう「世界を視野に入れる」ということがようやくわかりかけてきた気がします。ですので、これはあくまで通過点であって決してゴールではないことを理解しなくてはなりません。日々精進あるのみです。

(東京外国語大学ロシア語専攻四年)

二〇〇五年度

ロシア会総会・懇親会のお知らせ

今年度のロシア会総会・懇親会を左記により開催します。一年に一度の集まりです。昨年なくなられた原卓也先生の追悼会をいたします。多数の方々のご参集をお待ちしています。

日時 11月19日(土)

午後一時から総会

「原卓を語る会」

会場 府中キャンパス研究講義棟一〇七教室

「原卓を語る会」のスピーカー

平野 裕氏(昭28卒)

亀山郁夫氏(昭47卒)

安岡治子氏(院昭56卒)

司会 渡辺雅司氏

懇親会

三時三〇分～ 大学会館一階食堂で

懇親会でもなるべく多くの方々に原卓也先生の思い出を語っていただくことを予定しています。

会費 五千円

当日は外語祭の期間中です。ロシア語劇は「ワーニャおじさん」。
午後6時20分からマルチメディアホールで上演します。

ロシア会の皆様に

渡辺雅司

原卓也先生が亡くなられて、早いもので一年が経ちました。そこで今年度のロシア会総会は先生の一周忌もかねて、上にお知らせしたように「原卓」を語る会にしたいと思います。

東京外語ロシア語科に文学の風を吹き込まれた原先生は、言葉の達人でした。原卓さんに怒鳴られたり、慰められたり、励まされたりした学生は多いはず。かく言う私は怒鳴られ組でした。しかし原卓さんは、怒鳴りっぱなしではありませんでした。そんな体験を語り合い、言葉の断片を集めて、今は亡き原卓さんを甦らせようというわけです。原卓さんは、にぎやかなことが大好きでした。もちろん、お酒も。

総会では平野裕(昭和28年)、亀山郁夫(昭和47年)、安岡治子(院昭和56年)さんに原卓也先生の思い出を語っていただきますが、懇親会ではなるべく多くの方にお話をさせていただきます。若い学生達に原卓さんの人となり伝えたいものです。

(東京外語ロシア会会長)

編集後記

ロシア会総会・懇親会のお知らせをかねた会報をお届けします。

巻頭には早川徹氏にご寄稿いただきました。一八七三(明治六年)の東京外国語学校開設から百三十二年、そのうちのある時代の貴重な記録を頂いたと存じます。

「ブーチン大統領とユーラシア主義」の佐藤富水ゆき子さんは一九九二(平成四年)のロシア語学卒業生で、いま大学院で研鑽を積んでいらっしゃいます。このテーマは多くの方の関心事であると思います。

日露修好一五〇周年記念事業に参加した堀口大樹さんと日本ユーラシア協会・東京ロシア語学院主催第34回全国ロシア語コンクールで優勝した坂本翔一さんの文章をお載せできたのも嬉しいことです。

会報の制作にあたり、学生幹事の宜壽次彩さんの素早い協力がありました。記して感謝いたします。

今年のロシア語劇はロシア会の終了直後に上演されるようです。一昨年、昨年につづくチエーホフ劇です。マルチメディアホールはこれまでの上演会場に比べ広く、舞台用の設備もとのついでです。

(昭34卒 Y M)